展景

季 刊

No.88



日次

赤坂迎賓館

河村郁子

匹 ツ 谷 駅 赤 坂 出 7 秋 霖 \mathcal{O} 並木 路 ょ り 迎 賓 館 仰

西 門 ょ ŋ 手 荷 物 検 査受け 終 \sim 7 ネ 才 バ 口 ク \mathcal{O} 建 物 13 入る

正 面 O赤じ Ø う 6 \mathcal{O} 階 段 を 玉 賓方 が 上のぼ 5 る る n

中 央 階 段 \mathcal{O} 左 右 \mathcal{O} 壁は イ 夕 1] \mathcal{O} 大 理 石 \mathcal{O} 鏡 張 *b* な

朝 日 \mathcal{O} 間 \sqsubseteq 0 天 井 画 第 七 天 国 は 改 修 中 K 7 拝 観 で きず

花 鳥 \mathcal{O} 間 \mathcal{O} 大 ヤ ン デ IJ は フ ラ ン ス 製 壁 に 日 本 製 0) 七 宝焼

习 衣 \mathcal{O} 間 13 は 曲 面 画 法 O天井画 と 踏 会用 楽団 テ ラ ス

金 箔 O0) 浮 彫 ŋ O彩鷺 \mathcal{O} 間 鎧兜 に 剣 0) 七 チ フ

建築と室内 装 飾 \mathcal{O} お ほ か た が フ ラ ン ス 志 向 O国宝指定

主庭にて本館全景背景に噴水池撮り見学落美

右手真直ぐ選手宣誓天高し

うしろより吹かれ秋風と思ひたり

秋夕焼声失ひて見つむのみ

庭

掃

除

残

7

9

る

ベ

落

か

な

まとまらぬ一事のありて鰯雪

しつかりと生きるは難し虫時雨

マンションは建たぬままなり草紅葉

水澄むややつぱり思ふ君のこと

軽きもの羽織りて燈火親しまむ

つひにひとり年老いてゆく秋深り

展景 No. 88

竹 O春 う な を 61 風 通 る

花 野 原 か 11 な を 櫂 7 渡 ろ

香

13

酔

う

7

後

ろ

に

傾

菊

人

形

前 世 ŋ 月 O満 5 欠 け 見 ょ لح 61 う

胡 桃 割 る 父 O手 か 9 7 炭 鉱 掘 る

川 \mathbb{H} は Þ ベ 1] T か 5 O友 迎

雉 鳩 を 埋 葬 露 \mathcal{O} 玉 零

友 Š 11 K 逝 き わ が 肩 K 秋 茜

隠も 沼ぬ \mathcal{O} 下 \sim 羅 針 儀 九 月 尽

行

< 秋 Þ 鵜ぅ 松い 明^{かんば} \mathcal{O} 灯 を す

布宮窓子

に 6 げ 6 は __ 本 \mathcal{O} 管だ لح λ ぼ 舞 Š 医 院 O庭 13 秋 深ま ŋ 7

13 h げ λ は ___ 本 \mathcal{O} 管 あ Š n か る 庭 O花 々 そ \mathcal{O} 名を 知 5

に h げ 6 は 61 0 ぼ 6 \mathcal{O} だ安堵す n ば 天 然酵 母 \mathcal{O} ベ グ ル を買 Š

商 Š *5 ノ* 61 ゥ さな移動マルシェとして無農薬野菜や天然酵母パンなどを販売。 V さ λ 麹屋 \mathcal{O} 店 先 25 7 吸 5 せ 5 れ 「農家の窓」の意味らしい。

車

付 け 7 る る 夕 グ OON WAR NO NUKES を ノ ウ マ ド O店 主 は Þ 気づきたり

買 Š 勢 S づ きて 魚屋 13 母 \mathcal{O} 好 物 \mathcal{O} 昆 布巻き求 tr

ゃ うや 13 帰 ŋ 来たり 7 温な 8 た る 南 瓜 ス プと ベ グ ル 噛 J. む

初 8 7 \mathcal{O} 軽 自 動 車 · を 試 乗せむ と小 雪 舞 Š 日 \mathcal{O} 午後 を出 で

決 8 5 る る 道を左折す 迫 ŋ るごとき真白 \mathcal{O} 蔵 王 連 峰

雪 \mathcal{O} Н は 鳥 ₽ 少な ほ ろ ほ ろ と歩 8 ば 目 K 沁 む 南 天 \mathcal{O} 赤

展景 No. 88

朝 ょ ŋ ビ ル 改 修 \mathcal{O} 足 場 組 む 金属音ときを ŋ 若きら 0 声

足 場ごとビ ル ___ 棟 が 覆 は n 7 音 な < 人 \mathcal{O} 動 < 気配 す

未 パだ稚きこ O百 日 紅 花 9 き 0 ょ 7 新 築 マ ン 日 ン を 祝^ょ ぐ

西 陽 Š 金木犀 か そ れ な ŋ \mathcal{O} 樹 形 な ŋ が 花芽す

株 分 け を た る ヒ マ ラ ヤ ユ キ 1 シ タ 雨 13 11 き 61 き花芽を待ち X2

台 風 \mathcal{O} 過ぎた る Oちを茗荷 O子 庭 O繁 Z 13 頭 \mathcal{F} たげ

「落花生新物入荷」 O札 み れば不慮 の死とげ し友の 顕ち

駅 前 \mathcal{O} 惣菜店 に品 選ぶ 友居 れ ど声 は か け ず 13 過ぎ来

落花

生

0)

新

物送り

れ

し友を思

Š

よ 旅

に逝きたる

n を n 0 電 話 姉 \mathcal{O} 決ま n 文句 貴女は 五 一歳年下 だ か ら…

を

展景 No. 88

結

城

文

Ш 際 に 消え \wp 機 影 を 見送 り **X**2 靴 深 深 لح 砂 に 沈 ま せ

音 た 7 て近づ き 来 た る \wedge IJ コ プ 夕 1 黒き 影 覆 S n Ø

桜

前

紅

葉

前

線

Š

情

報

K

何

か

落

5

0

か

X2

季

節

好

まず

私 が 私 向 か 0 7 11 Š 言葉さ が 7 歩 ヒ メ ジ 才 ン O原

野 を \wp きて び 0 ŋ 0 き 草 O実 を _ 0 __ 0 と るも 楽 み 0)

人 人 \mathcal{O} 祈 り に 立 7 り 半 眼 \mathcal{O} 奈 良 \mathcal{O} 2 寺 \mathcal{O} 古 きみ

危 険 と は 隣 り 合 は せと 思 Š \mathcal{O} 玉 砂 利 \mathcal{O} 道 にき む 玉 砂

利

取 り 返 0 か X2 不 運 0) こともあ る 良 か n 思 ひ 7 選 び 道も

叶 は ざ n こと \mathcal{O} 数 数 夕 暮 n \mathcal{O} わ が 法 師 لح な n 7 9 きくる

世 紀 末 Oとき街 な n 斜 \emptyset さす 夕 ベ \mathcal{O} 光 0) ビ ル \mathcal{O} 間 \mathcal{O} 道

満 月 \mathcal{O} 明 ŋ とど か ず 街 灯 \mathcal{O} をそぞろ に 家路 をたど

冬支度 せ **X**2 間 に 寒き夜と な n ベ ツ K 力 バ を か け まま 寝る

夜 \mathcal{O} 雨 13 た れ 7 落 5 金木 犀 11 ろ 鮮 や か 13 路 肩 散

り

思 61 託 す 候 補 \mathcal{O} 名 を書き投票所 出 で る 今 日 は 土 砂 降 n \mathcal{O} 中

ほ と ば る 思 13 は 言 葉 13 なら ず 7 耳 か た む け 7 風 \mathcal{O} 音 聞

 \mathcal{O} 中 少 女 13 呼 ば れ 手 を 取 れ ば そ \mathcal{O} Þ わ 5 か さ 兎を羅る 綿めん \mathcal{O}

咲 き終え 朝 顏 \mathcal{O} 0 る 引 前 \mathcal{O} 種 を集 め 7 ま た咲 か せ 6

葉 が 13 南 天 \mathcal{O} 実 \mathcal{O} 色づきて 通 り が ŋ 13 手を 触 れ 7 み る

ウ イ K K 映 る わ が 顏 叔 母 13 似 7 後 ろ 姿 は 母 \mathcal{O} ょ ć n

た る 母 ع 叔 母 逝き久 7 声 b 仕 草 b わ n はまとえ n

イ チ ジ ク は 始 末 な に \mathcal{O} び る b \mathcal{O} 実に 袋ま で 7 13 るそ O家

~ ン チ K は す わ り 跡 あ る Z 5 \mathcal{O} 先樹 下 0 ベ ン チ \mathcal{O} 端 が 光 0 7

縦 列 な 9 7 み 5 渡 る 少 女ら 13 9 61 7 渡 n ば か か 香

幼 児 が か 5 だ 11 0 ぱ 61 13 ゲ ツ す る 返 り J. す れ ば 通 袁 \mathcal{O} 5

乗 Ŋ 0 13 で 9 ど 13 隣 は 眠 る 人 / 若き男 は 重き 肩 ょ す

自 転 車 は 年 ょ ŋ 多 花 \mathcal{O} 束 前 か Z る 今 H 彼岸 入

Š λ 5 を 数 で か ぞえ しことなきや 几 方 に バ ラ け W 水鳥ら

あ る か な き か 0 縁 先 か ら 雨 戸 繰 る 人 が 11 7 住 む 小 貸家 あ

バ IJ 力 ン 0) 皮 剝 ほ ど \mathcal{O} S 9 か か ŋ ょ み 痕 を 車 内 に み た

な が り に な 5 X2 Ш み る 取 n 分 け て子 持 Щ み る 州 \mathcal{O} Ш

0

20

石久美、 平成二十九年八月十七日 小野澤繁雄、 林博子、 (木)、会場・文京シビックセンター三階B会議室。 詠草は各二首六首。 丸山弘子、 松井淑子)。 出席者五名 大

熱たかき身は浮くごとし耳近くギシギシと響る氷の海が

博子

くようだ。熱のある状態が感覚的に把握されている。 く、ギシギシと響る、が氷枕を使っていることの手がかり。 もう一つの歌からも、入院中の歌としれる。響(な)る。 身は浮くごとし、 身は浮くごとし、が遠い幻想を導熱たかき、は発熱の状態。耳近

片づかぬものが出ていてそのことで人住むかたち小貸家ある

小野澤繁雄

歌からいろいろ話題がひろがった。貸家では、むしろそのことで人が住んでいるということになる、という。 やや理がかっている。片づかないものが出ていることは、 空き家の指標でもあるところ。小 今、空き家は多い ので、

つ二つ鶴の折 り紙散りてをり 小学生も飾り し黄の

中川禮子

ていて、八月前半、その像を守るように千羽鶴が飾られた。この歌の情景はやや断片だが、小もう一つの歌で、次のようなことがわかる。二宮駅にガラスのうさぎ像(少女像)が置かれ たのが「ガラスのうさぎ」。その話がしられなくなったことから、最近、千羽鶴を飾るようになっ その糸から外れた鶴か。二宮に疎開していた児童文学作家・高木敏子が自身の戦争体験をつづっ 学生も飾りし、が挿入句的に説明になっている。小学生も糸通しを手伝っている。一つ二つは、 たという (新聞記事)。

東京歌会 (第五十九回)

茂子、 九月二十一日(木)、 大石久美、 小野澤繁雄、 会場・文京シビックセンター三階A会議室。 林博子、 丸山弘子、 松井淑子)。 詠草は各二首十四首。 出席者六名 市

県内にのこる樋門のそのひとつ思 61 0 ほかに水の量ある

小野澤繁雄

読みに迷うことはない。上、樋門は、制水施設の一つ。 近代化遺構、埼玉県内に多く残っているという。 下句のつながりがやや遠い。 樋門がわかれば

はらからと雖も赤に緋に紅のありて混らず咲くさるすべり

博子

22

何か 展景 No. 88

気持ちの違いのようなこともある。 (じ) らず。 近い色でも色の違いはあって、混じることはない。兄弟姉妹の間 作者は妹を失ったばかりで、 傷心の歌でもある。 でも、

遠く聞く神輿をかつぐ児らの声わが家の前は通らずなりて

丸山弘子

やや淋しい感じか。神輿をかつぐ児ら、とみえるように詠った。 遠くに聞く。こども神輿。今はこどもが少なくなっている。 わが家の前は通らずなりて、 で

陽に映えて黄花コスモス咲くところまつわりながらしじみ蝶舞う

市川茂子

では黄色コスモスと云っていたという声もある。今は多くみるところ。しじみ蝶は小さい。平地、低地帯でみる。黄花コスモスが眼にみえるようだ。 名前をしるま

リアントマトとオクラ、 インゲンが生りて賑はふ夏の畑よ

布宮慈子

と音がそろって、 音がそろって、またカタカナ表記がリズミカルでいい。小さな畑のようだ。イタリアントマト、は赤みが強い、長ぼそい。イタリアントマト、インゲン、

工 レ ベ ター を降りきる迄にかたわらのみどりごとかわせる笑みのふたたび三たび

大石久美

たたび三たび。四句が長い。作者は十一階に住むが、こ エレベ 嬰児、 ーター内なのだ。 の表記は選択されていない いくらかの時間があり、 ひとたびでなくふ

片づけてゐるときに見る新聞の切り抜に見出づ惜しき人の名

·川禮子

の名、 切り抜(き)。訃報だろうか。新聞なので、 にはニュアンス (含み) がある。 いくらか知られた人ということになる。 惜しき人

東京歌会 (第六十回)

川茂子、 十月十九日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は多く各二首十三首。 大石久美、 小野澤繁雄、 林博子、 丸山弘子、 松井淑子)。 出席者六名 市

になっている。そこは見やすい。下句はいいという。 ありなれて、に議論があつまった。川土手があるからには川があり、 そこがまちの境

姉と妹互みに睦ぶ短さよリリアン遊びの絲のほろほろ

展景 No. 88

女性には理解に問題がない。ほろほろ、姉と妹、いっしょにいた期間は短い。 ほつれやすいのだ。 作者は、妹をさいきん失っている。 リリアン遊び、 は

取り寄せの新米すこしいただきて磨ぎこぼれたる粒をひろえり

れで、 新米の貴重さ。人間関係でもある。下句、にはわかるという声が多い。 同じでないようだ、 少し話題になった。 米のとぎ方はそれぞ

さよならと別れし吾子のふりかえり手をあげてより歩み去りたり

大石久美

親子のやりとり。上句の語順だが、入れかえたいと提案があった。 当日会場で即詠したもの。息子さんがこのところ車で会場まで送ってくれている。そこでの

朝よりビ ル改修の足場組む金属音ときをり若きらの声

丸山弘子

きて外国人も多く、若者が多いのだ。 下旬は、 メリハリの効いたいい方。足場だけ請けおうような業者もある。 足場は、 金属で組む。 職人には、ここに

朝毎に吾妻嶺に冠雪のニュースあり今年もあと二ヶ月となる

池田桂

くなってゆくのか、 作者は福島県伊達市に住む。 ニュースの決まりになっている。 吾妻山の初冠雪は、ことし早かったようだ。 下句がいい。 冠雪は、 徐々に厚

13 0 んにわれが英語を写しゐる子らに離るか任期果てなば

だろうが、 当時の場所で詠んでいる。 教師をしていた。われが英語、 は黒板に板書した英語だろう。 すでに過去になるの

小野澤繁雄)

が … 雨 が・

しの つかって寝床に入る。 くひと区切り。 今日こそゆっくりしよう、 今日こそ体を休めようと、

しうとうとしはじめたとき、 カタッ、 何かが揺れる音がする。 いやな予感が走る。

始まった。 いきなり 大風が……。 そして降り出した雨はスタッカ

のあいだに風も雨も激しさを増す。 のひと吹きで、 しれない。 風雨にさら 仕立ての 眠っ てはいられない。 に落ちて 四方に枝を伸ば しまった盆栽たちの 急がなければ…… したコ ムラサ キは倒 ンがよぎる。 n 少し

マの上からオ パンツやジ トを着込んで外へ飛び出す。 引き返す余裕はない。 雨合羽を着るのを忘れ



安全を考えて、 コムラサキは温室へ移動、 その他の草木も低い 棚 へ集合させた。

ボォ 再び外灯でて ッとなっ てい した庭をウロ ウロする。 横なぐりの雨や風が時間とともに体にこたえて、

0 な盆栽がなくな おぼつかない 足どりでデッキ脇の棚に近づい 近くの小さな盆栽も横倒しにな っていることに気づく。 ここは建物に囲まれて安全なはずが、 ったり落下し てみると、 て、 の隅にあるはずの まともに棚上で立っ どう フォ したわけ -ギラの か棚 大き か

になっていた。 過ぎたような光景がひろが 0 てい る。 庭でい ちばん穏やかと思える場所が大変なこと

雨合羽のことは、 とにかく拾い ひと通り庭をまわり終えた頃には、 上げて軒下 とうにどこかへ行っ -へ移す。 鉢が 7 割 11 つの中で水は踊り、 n たか、 くたくたを通り越して感覚が無い 枝 が折れたかどうか 体中ずぶぬれでグシャ は、 朝 確 認 グシャだった。

夜が明け たら、 始めない 負傷した盆栽の手当てがある。 荒れた庭の片づけもある。

根洗い仕立てについて…皿上で植物を育てる方法。 部分を鉢から取 露わに見えてい 数年後には苔におおわれる。 すると充実した根のかたまりが姿を現す。 鉢の中で根が密になった頃を見計らっ 自然にそうなる。 それを皿の上で育成。 はじめは



根洗い仕立てのヒバ (ヒノキ科) 盆養 28年

長岡山の戦いと 「ふるさと教育

神村 ふじを

降る雪や明治は遠くなりにけ ŋ 中村草田

遡る。 点であった。 二つあるのは禁忌だが、草田男なればこそ名句となり得る。 この草田男の句は、 が、今の日本の姿の元になったことは間違いない。その意味で戊辰戦争の終結は大きな転換 俳句に関心の有る無しにかかわらず、 誰もが知る句である。 明治維新は遥かに遠く150年も昔に 切れ字が る句中に

に感じられない内容だ。 新まで500字余り。 小学校で習う歴史は広 あくまで中 公く浅い。 央の視点で淡々と書かれており、 幕末につい 、て教科書の の記述では、 子供たちにとってはあまり身近 \sim IJ が浦賀に来て から明治維

以前勤務した学校で、 6年生が会津若松に修学旅行に出掛けるときに、 戊辰戦争が寒河 江え

材になっている。 に授業を行っ に残した痕跡、 ている。 とりわけ庄内藩士と桑名藩士が官軍と寒河江市街西方で戦った長岡山 戊辰戦争と寒河江との関わりは、 生きた幕末・明治維新を学ぶのに格好の教 の戦い 、を中心

逃亡と目される事件などもあり、 は弟の松平定敬公。 旧幕藩体制の有力藩であり親藩大名であった会津、 お互い京都で天皇守護という役目にありながら、 薩長の新政府軍が掲げる錦の御旗にたてつく逆賊となってしまっ 桑名両藩。 会津藩主は松平容保公、 第15代将軍徳川慶喜公の敵前 桑名藩主

ともに旧幕藩体制の首魁と目されていた。 ら資金援助を受け 庄内藩は大政奉還後の江戸薩摩藩邸焼討事件で、 米国製 のシャー - プス・ カービン銃で軍備の増強を図っ 薩摩藩から恨みを買っており、 ていたため、 大地主本間家か 会津藩と

藩兵は、 勝海舟らの努力により江戸城は無血開城となったが、 宇都宮で官軍と戦い 、会津、 庄内と転戦することになる。 庄内、 会津藩とともに佐幕派であった桑名

城下へ入ることを拒まれ 公が米沢へ向か 桑名軍は宇都宮の戦い後、 ったとの報を受け、 藩主が身を寄せている会津若松へ向かった。 跡を追おうとしたが、 米沢藩はすでに恭順 しか の姿勢を示し、 城下手前で定敬 米沢

定敬公は、 籠城やむなしとする兄容保公と涙の別れをし、 福島、 仙台を経て函館へと移動

する。 途中だった庄内・桑名両軍に米沢藩兵が襲い掛かった。 軍が寒河江 なった。 9月8日には に先着 明治と改 していた庄内軍と合流、 完に な ŋ, 西郷隆盛は庄内討 本町の本願寺で宿営。 伐 寒河江と移動 戦の常套手段なのだろう、 0 ため軍 手を進め 9月20日早朝 7 61 た。 の濃霧 9 月 降伏恭順 0 19 中 日 朝食の の藩の

行き場のなくな

った桑名藩士は、

白石、

山

形、

頼み

の庄内を目ざすことに

32

兵士は先陣役となり、

米沢藩兵は奥羽越列藩同盟の友好藩だった庄内藩にやむなく刃を向け

たので

隊が控えていたのである。 て寒河江 歴戦の勇士たちも次々と討死。 桑名軍40 の町は白兵戦 Ŏ 名 の様相となった。 は、 桑名軍は地理不案内の上濃霧が立ち込めてい 米沢藩兵10 それでも作法通り、 しか 0名・ 新政府軍には、 薩摩藩兵20 首級は敵に渡すまいと介錯を受けここで8 0名と新宿で応戦 後陣に総勢2500余りの たため、 たちまち苦戦とな たちまちに が薩摩本

桑名軍は午後になると新政府軍に包囲された。 町、上町、六供町を経て、 立見鑑三郎が指揮を執り、 沼川沿 長岡山へ退却。 1, に陣を敷 霧が晴れるとさらに新政府軍 13 たが 圧倒 的 な新政 府軍 の猛攻が始まり \dot{O} 攻撃に、 Ħ 市場、 庄内 西

桑名軍は包囲網を突破し、 北西 の白岩陣ケ 峰ね に移った。 左沢にい た桑名藩の が 援 軍

到着して、 寒河江 |川に架かる臥龍橋を挟んで銃撃戦になっ

峠を越え、 新政府軍が渡河、 肘が、 清川を経て庄内藩領へ逃れた。 陣ヶ峰に攻め入った。 桑名軍は2時間ほどの激 しい銃撃戦 の後、 幸き生き か

なってい 春院には桑名藩士18名と唐津藩士白水良次郎の墓がある 桑名藩士ら戦死した19名の亡骸は、 たが、 寒河江市本町 の曹洞宗陽春院の住職大観和尚 賊軍であったために官軍の が見るに見かねて 報復を恐れて放置されたままに 自院に埋 薬し た。

うな足跡が残っているのだ。 幕末の世界は、 寒河江に住む子供たちと決して遠く無縁なことではなく、 伝えること、 学ぶことの意義を大きく感じているところである 身近なところにこ 0 ょ

がれてい ことを載せたが、 「ふるさと教育」 ないし、 に触れ 子供たちはもちろん、このことを知っている大人たちもそう多く 教えられていな たい がために、 いのだ。 また埋もれている史実を伝えたいがために長岡 は ない 山の ŋ 11 \mathcal{O}

う立場から、 学校では、小中高とも国で定めた学習指導要領に則 大きく 地域格差が出ないように基本的な授業時数や授業日数などが示され すことはできない って授業をしなけ n ばならな てい 13 0 る 公教育 ので、 そ لخ O) V)

は はあるが 教科書をこなすの 「ふるさと教育」 の名の下、 が 精一杯で、 地域に根差した教育を実践している市町村や学校はある 自分たちの身のまわりの学習までなかなか手が回ら な 61

のが実情である。

ように言われており、 おまけに、 小 6 · 中3で実施されている学力・学習状況調査の数値をいかに上げるかが至上命題 学校は汲々とした状態にある。

える。 わる。 深く学ぶことなどますますできなくなってしまうと危惧している。 また、 限られた時間の中でどのように時数を生み出すか学校では四苦八苦しており、 道徳と外国語(小学校5・6年) この3月に新 しい学習指導要領が公示され、 が教科として導入されることになり、 来年度から学校で教える学習内容が大きく変 さらに学習内容が増 地域のことを

はないかと思うときがある。 行ってこなかったがために、 因が考えられると思うが、こと教育に特化して考えた場合、 若者の地域離れ・ふるさと離れは、 少子高齢化、 就職の問題や魅力ある地域づくり、 地域崩壊、 限界集落などの問題が出来してきているので 地域に目を向けた教育を本腰を入れて 子育て環境等々複雑な要

すべきだと思う。 遅すぎた感は否めないが、 参考文献… 「寒河江市史(下巻近代編)」寒河江市史編さん委員会(平成19年2月) 現状に立ち返って、 11 · ま 一 度 「ふるさと」を学ぶことの重要性を認識

鈴木芳雄著「戊辰の挽歌―桑名藩士情熱の奮戦録」新日本法規出版刊



展景 No. 88

KNO 河村 郁子 布宮 慈子 水野澤繁雄

| 風が吹いてコスモス揺るる日はものみな透きて秋が来てゐる 9 | 間帯すぎても秋の風のなかみちの半ばは通学路にて | 型の台風かすめて過ぎし朝気づかい合うは夜半の強風 | じりじりと台風18号北上す三連休をものともせずに 9 | 々へ追われんがにもハグロトンボ足すすめても足先にいる |
|--------------------------------|-------------------------|--------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 月 30 日 | 月 26 日 | 月 20 日 | 月 18 日 | 月 15 日 |
| N | Ο | K | N | Ο |

晴

々

弓も

0

者

5

遠征

か

駅

O

ホ

A に

歩 み

な

5

べ

7

10

月

0

秋 日な

か菩提樹

0)

実の

あまた垂れ

落

つるともな

く 幽

け

Ø れる

10 月

> 1 \mathbb{H}

Κ

山

形

O

玉

「 際 ド

キ

ユ

X

タ

IJ

映

画

祭は

じまり

街に外国

増

Ø

10

月

日

Ν

| 住む人の絶へて久しき庭内に熟れたる柿の一つが落ちぬ | 「神様の食べ物」といふ学名を知りたる夕べ柿の実甘し | 青桐の樹下にあそびしわれなれど甲冑色をみてすぎるのみ | 柿の木の青葉のあはひに潜みゐる橙の実今年はたわわに生らず | 紅葉する瀧山ははや夕暮れて三日月浮かぶ色なき月がもみち りゅうぎん | 黄葉にあいたるみちは竿をもてたたいている人下に銀杏 | 桜木の葉に黄の色の交ざる様わが髪に触るる思ひこそすれ | 映画祭終はれば木々の葉はすでに色づいてゐる山形の街 | くさはらの一、二区画が野菜畑みどりのいろが少し違って | 練馬区の「みどりめぐりの会」に入り万葉歌もて牧野庭園へ |
|---------------------------|---------------------------|----------------------------|------------------------------|-----------------------------------|---------------------------|----------------------------|---------------------------|----------------------------|-----------------------------|
| 11 月 8 日 | 11 月 5 日 | 10 月 31 日 | 10 月 28 日 | 10 月 26 日 | 10 月 22 日 | 10 月 20 日 | 10 月 16 日 | 10 月 12 日 | 10 月 8 日 |
| K | N | О | K | N | О | K | N | 0 | K |

あ

Ġ

草

· の手

0)

9

け

5

れ

ぬ

そ

0)

中を低

井

61

7

ダ

IJ

ア

袁

あ

ŋ

11

月

11

日

Ο

O

日

ごろ

朝

O

散歩に

出

で

て会ふ

双葉公園

O

大きダ

IJ

アよ

11

月

16

H

Ν

| 久々に富士みるこの日気付いては六十九歳になりたるらしも | 赤富士を見しとふ友よそは吉兆 孫の生誕祝ひなるらむ | 朝焼けの富士山を見つ東京ゆ帰り来たれば山形の雪 | さつま芋掘りおる畑にいきあいぬ若きら云うは体験になる | 駅前の石焼き芋の香が誘ふ安寧芋の一本を買ふ | 東京は曇り空にてスーパーの入口にある焼き芋を買ふ | あるときはほとりに下りてみる水面下沼公園まだ生きている | 厳しかりし長旅終へて白鳥は羽をたためり 吾にし然り | 少しづつ覆はれてゆく雪の野に白鳥のこゑ降りくるごとし | 笑い声には年齢がある隅田川テラス歩いて声降るところ | 牧野庭園の白山茶花のあはひには乙女椿の密やかに咲くてぃぇ゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙ |
|-----------------------------|---------------------------|-------------------------|----------------------------|-----------------------|--------------------------|-----------------------------|---------------------------|----------------------------|---------------------------|---|
| 12 月 17 日 | 12 月 14 日 | 12 月 12 日 | 12 月 11 日 | 12 月 10 日 | 12 月 8 日 | 12 月 2 日 | 11 月 30 日 | 11 月 25 日 | 11 月 22 日 | 11 月 17 日 |
| Ο | K | N | Ο | K | N | Ο | K | N | Ο | K |



39 展景 No. 88 展景 No. 88

●文月に入りて台風3号の慈雨を給はる一日限り

なのだ。 列島全体なので、 る、なのだが、それも一日限り、というそっけなさ。嘆息が伝わってくる。それでも今やお天気は 生だったが、台風もやっと三号というところ。 まま雨がなかった。八月になってようやくの雨が台風の雨。暑さは七月半ばで失速、 「梅雨に入るも雨らしき雨降らぬまま」(一首目)とあるように、今年の(関東の) 一連に、 北海道の大雨、 大分の豪雨・洪水、 給水制限の記憶もある。 ほか心配りはある。 そこで慈雨、 11 であり、 梅雨は、暑 ろいろ心騒ぎ 一号は四月発

●朝曇ゆつくりふふむ緑茶かな

谷垣満壽子

方(仕事)を少し考えているようなところ、がある。順直な句。この関係、 かって曇ることが多い。 の一仕事」(森本順子)では、より直接に季語を受けている。 朝曇(晩夏《七月》)は、季語としては明治末期からという。暑くなる日は朝のうちから靄がか 剝き終へて蚕豆のかさ少なかり評者にも、共感がある。この句の直前の句もい 「旱の朝曇」という諺もある。ゆつくりふふむ、にはその日一日の過ごし なにがあっても緑茶から朝を始めて 例句「朝曇日の出ぬ内

信濃金盃小暗き胸を照らしけりいなのきんぱい

飯豊嶺、 シナノキンバイをみた。明るい。 は何か影になっていて小暗き、なんだろうか。ネットの写真で、 信濃金盃は高山植物。 夏霧、稜線、等々、一句ずつが、点々と、また順々と山登りをしている。掲出句 黄色い、盃状の花、だが花に見えるのは萼片だという。 ザイテングラート沿い アイゼン、 のお花畑の 雪渓、

一景ずつに、 道に迷い琴弾鳥に囃される景ずつに、調子を刻む、空気感がある。こんなこともある。

れさま」《四首目》)。地方で書店はなかなか生き残れない。 目)。かかわりがあり、また、思いがある(「四十年ちかくも店は愛されて 歌が前半の五首になる。 ってよいようなものだろう。それが故郷でもある。 始まりも終わりもしること、それはさびしいものとなった。夏に閉店した書店、それを受けての 始まりは終はりのはじまりこの夏に「書物屋ほんべえ」店を閉ぢたり 「開店の年」の、作者にとっては「若き日の一年間を手伝ひき」(三首 終わったのも一つのこだわり、 飯野さんと店おつか 布宮慈子

「昨夏のわが手」が触れて、 かかわりをもった仔猫のその後も夏の思い 出 0 つだった (四首)

41

42

小野澤繁雄

●昼間でも星の影さすという井戸に星の井鎌倉十井の一つ

きている場所が多く、 ところである。何回行っても違う顔を見せてくれる。歴史のある、というか言い伝えがそのまま生 る者にとっては魅力のある場所なのである。 「鎌倉」と題した一連は、久しぶりに自分が鎌倉を巡っているようで楽しかった。鎌倉は不思議 掲出歌もその類だろう。 住んでいる人には迷惑かもしれないが、 たまに訪 な

鎌倉は極楽寺坂切り通し若葉のみちは声ににぎわう

●長袖にもんぺ姿のいでたちに草むしりせり一時間ほど

丸山

草むしりには打ってつけだ。たいへんな仕事は「格好」から決めるのがいい。現代の生活ともん アジサイは翌年、さらに翌々年の花芽を考えて剪定するらしい。 東京は中野区に住む作者が、 取り合わせの妙が生んだ凛々しさがある。次の一首はアジサイの剪定について丁寧にうたう。 時季すこし遅れたりしが来年の花を思ひて紫陽花を剪る もんぺ姿になるとは! 61 いなあ。 調べてみてわかったこと。 もんぺは涼しいにちがいない。

れざる夜を眠れぬまま起き出でて航空障害灯の赤き灯見つ

文

いち日はひと日と過ぎぬ存在の小さき点滅繰り返しつつとさめた見方。次の歌も、生きることの描写である。 と呼ぶのを知った。眠れない夜の孤独感が出ていると思う。 都心の集合住宅からであろうか、高いビル の上に点滅する赤い 寂しいなどという感情ではなく、 り灯がある。 それを 「航空障害灯」

夕空に投げてはしぼる網のやうひるがへり飛ぶ黒き鳥群 n

は限らない。今回の一連は、聴覚による歌が多く見られた。 を傾ける。 異常な気候とは聞いて久しい気がするが、どの程度の異常なのだろうか。作者は自然の変化に耳 蟬のこえいまだ声なく七月の半ばを過ぎて異常なる夏 赤松の木蔭をえらび給水の二度目の休憩安達太良山行 生き物は環境の変化に敏感だ。猛暑との長期予報も、 安達太良への山行は健康的な歌。 土地によってさまざま。当たると 池田桂

●両の手を広げしほどの庭にして茗荷は花を付けておりたり

広くない庭だと断りながら、 連勝をつづける少年棋士あれば今日は如何にとニュースを待てり 茗荷とてタイミングを逃せば食するには向かなくなる。 作者は季節ごとの変化を歌にする。 食べられるものが庭にあるのは 毎日の観察がたいせつ。 市川

うれしいものだ。

連勝は二十九だという。 話題となった藤井聡太四段は中学生だ。昨年十二月のデビュー戦から無敗で、ことし六月までの 明る い話題に反応し、 歌にする。 できそうで、 なかなかできないものだ。

市

敬 老 0

どが 届 頃に 11 て、 0 部屋に並べて楽し 日になると身内の者や近所の親し しんでい 13 方々 か 5 ゼ ン 卜 0 品 な

な 途中 からは、 のに、今まで充分にいただいたから、 敬老の日と合せて年に二回もいただく もうい 11 ように よと断 っている なっ そ 都 O役にも立っ 7

ることはうれしい。 の年になると、 面映く て来てくれるので、 なるほど、 また同じように届けてくれる。 の日、 年を重ね 身近に居る方々の真心に感謝しながらの 敬老の日を問わずに、 てしまった。 折にふれて旅行のお土産や、 二十年、三十年と心変り 日々に、 なく また敬老の日と言わ 思い 手作 を寄せ ŋ のごちそう n

お土産をいただいたので、 が 母と同じ病院 前 か 5 敬老の 0 看護師になっている。 は 九月十五日と思ってい 敬老の日の気持も込めてくれたと思ってい 先日、彼女の た。 11 つも世話になっている看護師長と、 お母さんから、 私の大好きなお菓子とお茶 た。 0)

むらさきの大輪のダリアに、 今年は九月十八日が敬老の日になっていることなど気に留めていなかったが、 い花束を持って来てくれた。 Ó 彼女があ わただしく駆けこんできて、 しぶ 61 色の 小かさな ばあちゃ バラとワレ λ モコウをあ の好きな色の花を選んでたと言 しらった、 十八 目の 覚めるような 日 0 Ŕ 0 方に仕

ったままで一枚写したら、 ブルに置いて、 記念写真を撮ることにな なんとも見栄えの 悪い って、 顔になった。 彼女が急い で 13 るようなの で、 キャ ツ プを

た、むらさき色のキ って電話 てくれたら、身繕い ヤ ップの替りにもなるような帽子を取り出してかぶり、 して待っ てい たのにと言い ながら、 以前に彼女が 何とか格好つけ 買 つ て写 n

ってい 休みの った。 日にな つ たら、 Ø 0 ij 話 しに来るか ら、 ば あちゃ h は元気で居るようにと、 言 11 7

多忙な時間を縫って、 日からまた、 花を眺めながら、 敬老の日に来てくれた彼女のやさしい気持が愛お 楽し 11 思い 出に耽っ て、 年を重ねる日々 しく胸が熱くなる になりそうだ。

45

合だ。 してい \hat{O} る 人が多い 服装を参考にすることが多い。 の衣更えの季節になると、 ときは、 今日 は暖かい のだな、 たとえばシャツだけだったり、 私は外出に先立って、 と思って、 それにならった服にする、 ベランダから通りを歩 上着を着ずに手に持 く人 とい った具 ったり 々 を眺

ところがこれが問題で、 窓も二重のため て厚着に着替えに駈け戻ることがしばしばだからである。 と言うの 、晴れてい 私のうちは、 戸外との気温の差が大きく、外に出て初めて本当の寒さに気付き、 れば昼から日がよく射し込み、 マ ンショ ンの二階 0 かなり西に寄 冬場でも昼間は暖房を消すほど暖かい った南西向きの部屋 で、 お あわ け 7

る暇がなく、 先日も、 外を歩い そのまま病院にい ているうちに寒くなり、 ったところ、 だが医師との約束の時間 が迫っ てい たため着替えに戻

「そんななり だと風邪を引きますよ。 自分の からだなんだから自分で管理し てくれなけ ń

と主治医に叱られてしまった。

報番組が服装情報を一緒に流してくれるようになったのも、 うことだろう。 いちば ん頭を悩ますのは、 天候の変動が激 しい春秋である。 着る物に迷う人がそれだけ多い、 この時期、 テレ ビの気象情 VI

は寒暖の実感とは関係なくそれにならっ 制服などには、 服の 場合、 六月から夏服、 昔は季節ごとに着るもの 十月からは冬服という決まり てい が ほぼ決まってい たようである。 た。 があり、 その影響か洋服にも、 _ 般の人々も、 洋服に ことに学校 0 61 7 \mathcal{O}

家族 服を着た女性たちの姿が見られ、それが周り 季節と服装について、 たちの服装である。 21 イツ 间 日本軍 今でも忘れられない光景がある。それは終戦後まもなく、 多分四月末ごろだっただろうか。まだ夏前だというのに明る 一の代 々木練兵場で、 の樹木の新緑に映えて、 今の代々木公園) で暮らすようになった進駐軍兵士 なんとも美しかった。 い色の マ木の 半袖 ワシ \mathcal{O} ン 0

うになったのは、 洋服というのは、 このあたりからのようである。 四季と関係なく、天候の変動に合わせてなにを着てもい 11 のだな。 そう思う

未だに解 軍を進駐軍と呼ぶようになっ でながら、 it ない 疑問である。 てこれは衣服とも衣更えともまったく関係ない ワシ たのはい ン シ つからで、 ハ イツ そしてなぜだろう。 の風景を思い出すと これは私の昔からの、 ことだが、 一緒に思い 出 敗戦を終戦、 した。 そして

47

ようである マウスをいざ説明するとなると手に余るので、 ネットで用語辞典のようなものを検索すると、 次

0

が入っていたが、今は底面の光センサーを使うものが主流。 上で前後左右に動かすと、 (少し圧縮してある) パ ソコンで最も利用され その方向に画面のポインタが動く。 ているポインティ ン グ ·. デバ イス。 かたちがマウス(ネズミ)に似てい 動きの検知には前は底面にボール 手のひらに収まる機器をテ ブ ル

の版は大判の雑誌サイズで厚さも二センチ近くある。 もので、 コト バ ン ク の説明でも、 が、 てもとにもある あと二つ パ (ポインティング・ ソコン で困ったときに開く本」 デバ 困ったことがそれだけ多いということでもあ イス、 ポインタ) (朝日新聞 は説明が要る。 出 版 を参照した てもと

る。

た」まで十四項目にグル 「困った」事例 (目次) も九ページにおよび ープ化されている。 「警告メッセー ジで困った」 から、 「とにかく困 つ

いる者には、 ときによっ こういう本も必要で、 ては作業が 止まってしまうので、 またあることがビジネスにもなって パソコンがこの世に登場する前 いる か ら生きて生活し 7

ソフト ク環境でもあるので、 会社では、 や周辺ソフトもバージョンアップされるので、それぞれに対応も違ってくる。 同僚に聞くこともできるが、 不具合もいろいろで、原因の切り分けからかんがえなければならな その同僚も十 人は いなければならない。 今はネッ 11 0 基 ġ 本

を放り かず、 ということで、 出 つまずい したくなった。 たり、 いきなりでは あらぬところにい なかったが、 ってしまう。 マウスの動きが悪くなった。 これはストレスで、 ポインタが思うところに もうパソコンでの 作業

じだということがわかった。 マ ウスだったので、 と ŋ あえず電池を交換してみた。 ちょ っとい いようだったが、

会社であ れば、 ベ つなパソコンでため してもらうこともできただろう。

13 有線マ 0) で、 認識してくれるかどうか。 ウスもてもとに一つ残してあったので、 面倒はない か。 それに交換することもできたが、 パ ソ コ ン が 新

49

る。 仕組みもある。この場合、 対応も簡単なものから面倒なものまである。 で 「困った」を検索すると、アンサーがいろいろ返ってくる。 使用環境がまったく同じということはないので、 大抵面倒なものを考えてしまう。 よいアンサーを競うような 場合分けが必要にな

ところで、 何かひょ っとしたことを思い つくことがある。

この場合、 マウスパ ッドのかすかなよごれに目がとまった。

とすようにして落とした。 こまかい、 粒子のような汚れが点々とこびり ついている、 それを爪の先でひとつひとつこそげ落

これが正解だった。 ストレスなくうごくようになった。 こんなことというようなことだが、 これだった。

清紫会」だよ

回 平成二十九年八月十七日 (木)、会場・文京シビックセンター三階B会議室

〈提出作品〉 林博子・入院日記

第 159 回 九月二十一日(木)、 会場・文京シビックセンター三階A会議室

〈提出作品〉 市川茂子・敬老の日/ 林博子・ 母のこと/丸山弘子・ 不注意

口 十月十九日 木 会場・文京シビックセンタ 一三階A会議室

〈提出作品〉 小野澤繁雄・マウス/林博子・宇都宮と言う街/松井淑子・衣替え

展景 No. 88

展景 No. 88

52

を新会長に全てを託したはずだったのに、胃ガン悪化で死去してしまった。また新会長の選出などで一ヵ その下の弟(三男)が脳梗塞で倒れて日赤に入院し、約一ヵ月でやや回復したので、その後リハビリのた やり残したもの 月が過ぎ、 めに転院をくり返した。そして四 ◆今年は終活の準備年の予定だったのだが、 現状である。 妻がくも膜下出血で倒 五月末でやっと自分の用事が出来るまでになってひと安心という状態になった。 があまりにあるので、 れ、日赤病院に救急搬送されて入院後に間もなく死去し、一月四日葬儀。 月、 老人会の新会長にバトンタッチをして、それまで私が代行だったの 未完のものを完遂するのには一定の時間が掛かると思うと、気が重 何一つ予定通りいかなかった。昨年末にすぐ下の弟 が、それまで 池田桂 さらに、

なったような気がする。 言に、その通りだと自覚している。 で、この一年も終りに近づいた。先日、 嵐が過ぎて、急に冬の到来となった。外は何となく車の音や通りの話し声なども、 新しい年を迎えよう。 これからがあわただしくなるだろう。 気負わずに有りのままでい 友達に「展景」を送ったら返事が来て、 残りの仕事の片付や冬仕度などのくり返し いのだ。 移りゆく自然の景色やまわりを眺 「年を取ったね」との一 あまり聞こえなく

堂をみました。 いうのだそうです。小駅を下りて歩くのもいいと。思い立って、秩父鉄道(寄居駅)を、 ◆東京に近いローカル線に乗るのを楽しんでいると川本三郎さんが書いています。近鉄(ちかてつ)と 熊谷乗換、 、一日がかりです。戻ってきます。 で「ディエゴ・リベラの時代」展をみて、 終点の羽生まで乗り、下車、 (東武) 伊勢崎線で久喜まで、 歩いて、田舎教師(田山花袋の小説のモデル) 宇都宮線で大宮まで、京浜東北線で北浦和下車、県立近代 あと、 埼京線などで帰宅しました。 すべて県内ではあり の墓、 熊谷寄りに乗 小野澤繁雄 毘沙門

を帯び、大根も急に太くなり出した。農作物の持つ体内時計とでもいうのだろうか、 は人間を超えた何かがあるような気がしている昨今である 例がない超大型の台風であった。記録では、上陸日時が一年の中でもっとも遅い台風として歴代三位だそ ◆十月 の下旬だというのに台風21号が日本列島を縦断した。今々炬燵でも出そうかという山形ではあまり 全国で七人の方が台風の犠牲となった。ご冥福をお祈りしたい。朝晩の寒さとともに白菜が玉 時期を心得た成長に 神村ふじを

は出し入れ自由であった。 た。広いホールに大きなテーブルが幾つかあり、 なら誰でも入れ ◆今年の赤坂迎賓館の一般公開を申し込んだ。ここは、私が高校生の時は、国会図書館であ てい 明治三十二年に当時の東宮御所として建てられ た。 戦前は赤坂離宮であったから、 戦後は手入れも行き届かなかったものの、 向かい合うように椅子があった。周りは書 建築マニアの父は私を弾むように連れてい その後、 私は専ら大きなシャンデリアに見と 赤坂離宮として昭 和、 ŋ 今上両天皇も 棚で難し ってく 勉強する 13 'n

54

地方の 数の庄屋と禄を離れたさむらいたちであった。九州各地の大名と幕府から送られた軍勢十二万が城を囲 最後は殺された。 死者の続出する大凶 人に寄り添い、 家族の女、 乱をテー 石牟礼 その生活と魂を語る文章はあくまでも静かで美しい。 子供、 マとする。廃城に 道子さん 時間はかかるが、 作のさなかも、 老人たちも城中にあった。皆ふつうの人々。 0 『春の城』を読み始めて一ヵ月。 なっていた「原城」にたてこもったキリシタン三万七千人の大半は、 一苛酷な重い年貢をゆるめぬ藩の圧政に苦しむ「文字なき」農民と、 読者が一人でもふえるとい 『春の城』は一六三七年、 いな。 天草四郎もヒーロー ノ 1 城中の抵抗者は、 ベル文学賞にも値する作品と私 九州 赤ん坊に至るまで ではない。一人一 の島 原 天草

から名誉挽回してもらい ております。 ◆今年は台風が多くあ ŋ たい。 秋晴の少い十月であったと思います。 後二ヵ月で今年も終ろうとしています。 何か損をした気持になっ 来年もよい年でありますよう祈っ 7 います。 谷垣滿壽子

法については、農家には何のメリットもなく、 と一人で細々と有機農業をやっている私とはまず話す機会がないので、貴重な時間だった。 とされていたが、この辺はかつてない不作だったという。 く五十代の中堅農家。 ◆十月のある通勤通学の時間帯、 エダマメは実の入り具合が不揃いでこんなことは余りなかったとのこと。来年四月に廃止される種子 今年の作物の出来について、いくつか聞いてみた。コメは山形県の発表では 地域で年一度回ってくる交通安全の立ち会いをした。相方は昨年と同じ むしろ心配なことばかりと答えてくれた。農協出荷の農家 ソバは花が実になる頃雨にたたられて 新野祐子 ほ やや良 ぼ全

伸び放題、 とれたが、 ◆この前の七月、 一週間ぐらいで傷口はきれいにつき、傷口を留めてあった糸と言うかホッチキスの針のようなものは 白髪頭を振り立ててなんとも情けない状態である。 そのあとの赤みがとれない。赤みがあるうちは美容院にいってはだめ、 足を滑らせて後ろに倒れかけ、 柱の角に後頭部をぶ つけて、 十四針縫うほどの怪我をし と医師に言わ れ、 松井淑子 髪は

定まらず予定がたたず参っているんですよ、 までに体験したことのな ◆天候不順が相変らずで、今回も暑かったり寒かったり、 った。ちょっと驚いたのは、昨日は暑かったのに、 13 日があったことだ。 と言っていた。ことしは海流の変化もあり気になる。 ちょうど植木屋さんに入ってもらうころで、 今日は上着を一枚はおって寒さを凌ぐ、という今 梅雨のころのようにじめじめ したりで嫌な日が なかなか

丸山弘子

僕との日常物語。二人の会話、 帯住宅の一階部分に一人暮らしする大家さんと、 えさせられた。身寄りの少ない私の、これからのヒントになりそうな一冊である。 ◆矢部太郎さんという芸人さんが描いた『大家さんと僕』というエッセイ漫画が面白い。一戸建ての二世 距離感、社会に開かれている心の在り方等を通じて、 外玄関から出入りできる二階部分を借りることになった 笑いながらも深く考 山内裕子

思いながら、 の暑さは苦手だが、夏はやはり生命力に溢れた季節だったからであろうか? ろいは、 ◆夏が終わると急に年の暮れを意識する。一年の終わりが近いと毎年のように急に思う。そしてしようと 人の心のありかたにも微妙な差異を与えているのであろう。 まだ成し終えていない事柄をあれこれと思い悩む。この時期になると急にそう思うのは、夏 四季のある日本の季節の移 結城 文



ての予定をキャンセルしたのだが、 ◆少し体調を崩して検査を受けた。 身体あってのものだと実感した次第。 悪いものはないと医師にいわれ、ホッとした。 週末からの すべ

災の後だったため、 進をすると自動で止まる等、 加速もわりあい 「軽」は大きさや強度、走りもずいぶん改良されているというので興味をもった。乗ってみたら、 いた。車のことを何も知らないまま、 ◆軽自動車 の試乗に申し込んでみた。当方が山形に引っ越してきたのは二〇一一 力がある感じ。センターラインをはみ出すと警告する、障害物があるのに前進や後 中古の軽自動車のほとんどが山形から宮城県や岩手県にいってしまったと聞 安全の機能が付いていた。今すぐ車を替える予定はないが、 普通車のコンパクトカーを求めたのだった。が、近ごろの 年の十二月。 大震

験することは大事だ。さまざまな車に乗ってみて、はじめて違い に気づくのだと思う。

とば。 半ばを過ぎてからは別だろう。 とば。「それは枝葉のことだよね」「人生、正々堂々」。若いときは失敗も多い。しかし、◆嘘が堂々とまかり通る世の中のようだ。折にふれて思い出すのは、叔母・布宮みつこの言 のである。 掛けてもらったことばのありがたみが、 叔母・布宮みつこの言ったこ いまさらながらよく分かる 人生の

(布宮慈子)

59

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンラ イン版「展景」を公開しています。

> 制作 無二の会「展景」発行所 編集・発行人 山形市上町 二―一―七―二〇二 二〇一七年十二月二十一日 発行 スタジオ・マージン

布宮慈子

info@muninokai.com

季刊 展景 88号

Copyright © 2017 MUNINOKAI. All rights reserved.